

## 新型インフルエンザ 最近の動向から (12月24日新型インフルエンザ対策室第10報)

少しずつ小児の新型インフルエンザの流行も縮小傾向にあります。全国各地域で基礎疾患のない小児への新型インフルエンザワクチンの接種が行われています。先生方には引き続きお忙しい毎日が続いていることと拝察いたします。本日(12月24日)までの小児の新型インフルエンザ(重症肺炎・インフルエンザ脳症・心筋炎その他の重症例・乳児、新生児へのオセルタミビル使用例)の届け出は、重症肺炎・ARDS 361例、うち死亡3例(致命率0.8%)、インフルエンザ脳症94例、うち死亡7例(致命率7.4%)、心筋炎その他の重症例18例、うち死亡5例(致命率27.8%)でした。届出症例は引き続き増加していますが、幸い死亡に至る症例は前回から今日までの報告ではありませんでした。一方、乳児、新生児へのオセルタミビル使用例は計27例でした。その詳細につきましては、今回、神戸大学小児科 森岡一朗先生と防衛医科大学校小児科 野々山恵章先生にまとめいただいています。ぜひご一読ください。また、小児への新型インフルエンザワクチン接種実施されている中、届出症例の中でも予防接種歴の項目を加えていきたいと思えます。よろしくご協力のほど、お願い申し上げます。

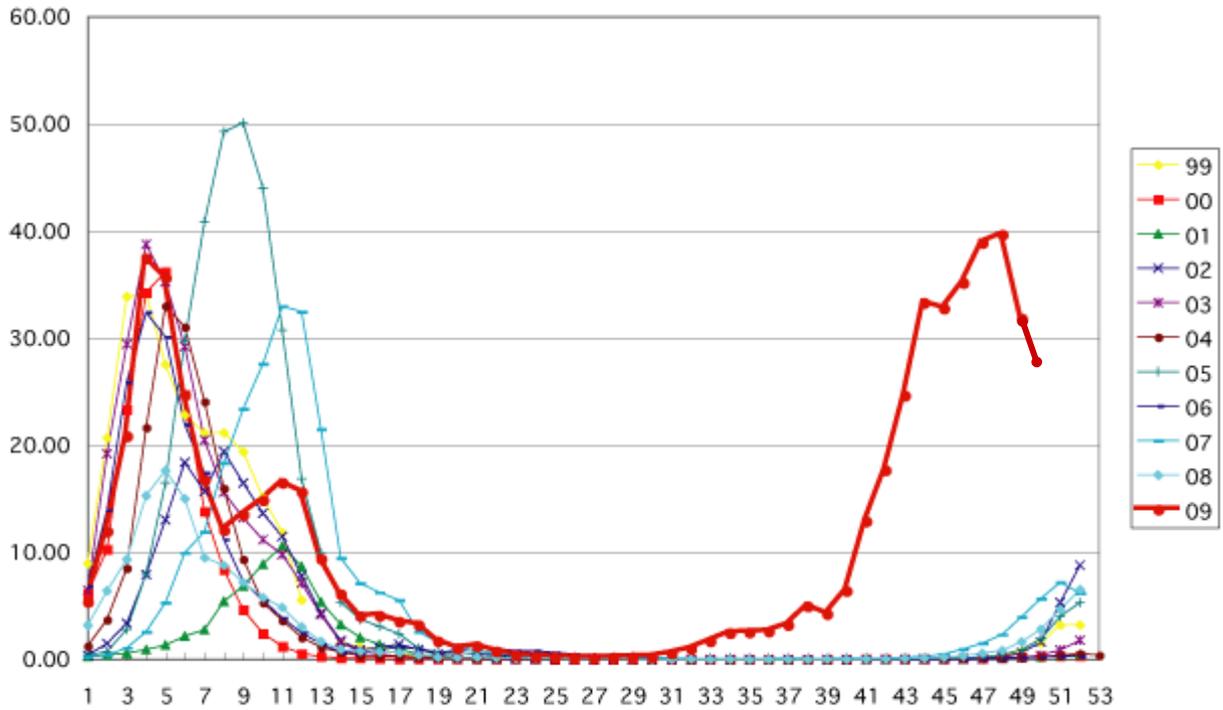
今回が2009年最後のご報告となります。新年以降、本格的な寒さの中、新型インフルエンザが再び小児の間で流行するのか、あるいは季節型インフルエンザの流行が始まるのか、については、米国やヨーロッパの動向が参考になると思えます。とくに、米国の流行は、下の図に示しますように、日本よりも約1か月早くピークに達し、その後、終息に向かっていきます。今後の日本の状況を予測する上で非常に参考になると思えます。次回は世界の動向を含めて、2010年の流行予測について考えてみたいと思えます。

2009年、先生方のご協力に、重ねて御礼を申し上げます。

(日本小児科学会新型インフルエンザ対策室)

09年インフルエンザ（赤）の定点当たり報告数（週報）

（国立感染症研究所感染症情報センターより）



米国の新型インフルエンザ患者数の動向—インフルエンザ様疾患の外来患者から推計—

（CDC 2009年12月18日報告資料より）

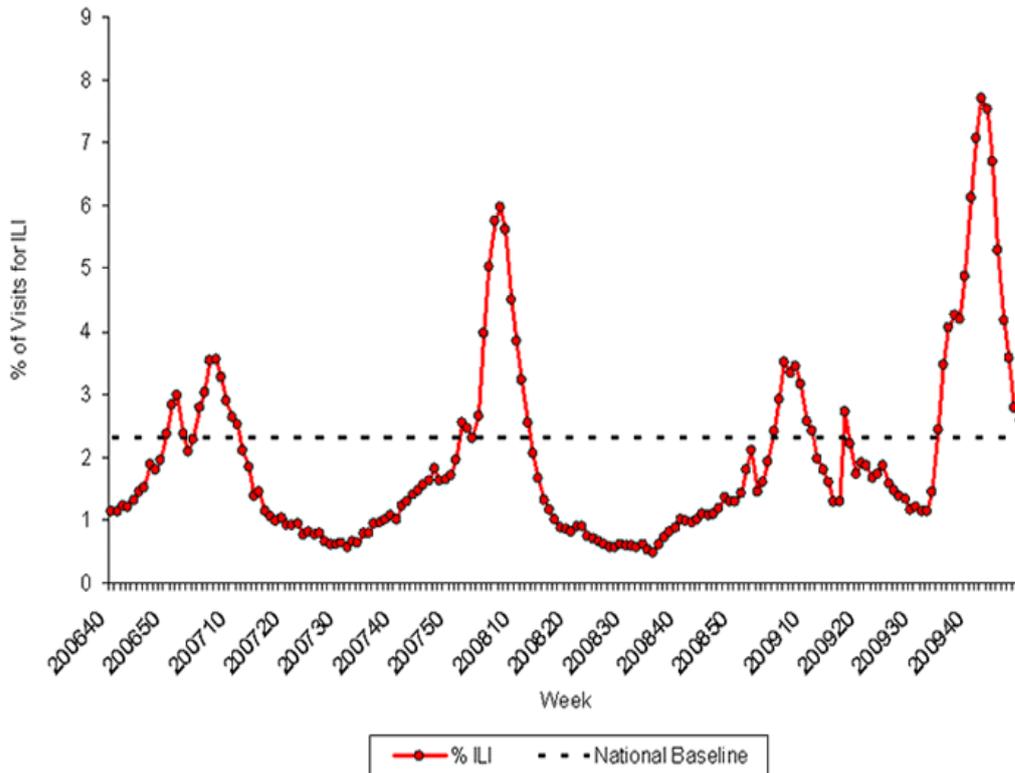




表 2 インフルエンザの初発症状

発熱	21 (95%)
活気不良	3 (14%)
肝機能障害	2 (9%)
不機嫌	1 (5%)
哺乳力低下	1 (5%)
上気道症状(鼻汁)	1 (5%)
無呼吸発作	1 (5%)

インフルエンザの診断は、迅速検査または PCR 検査で行われており、臨床症状のみでオセルタミビルを投与された症例はなかった (表 3)。

表 3 インフルエンザの診断方法

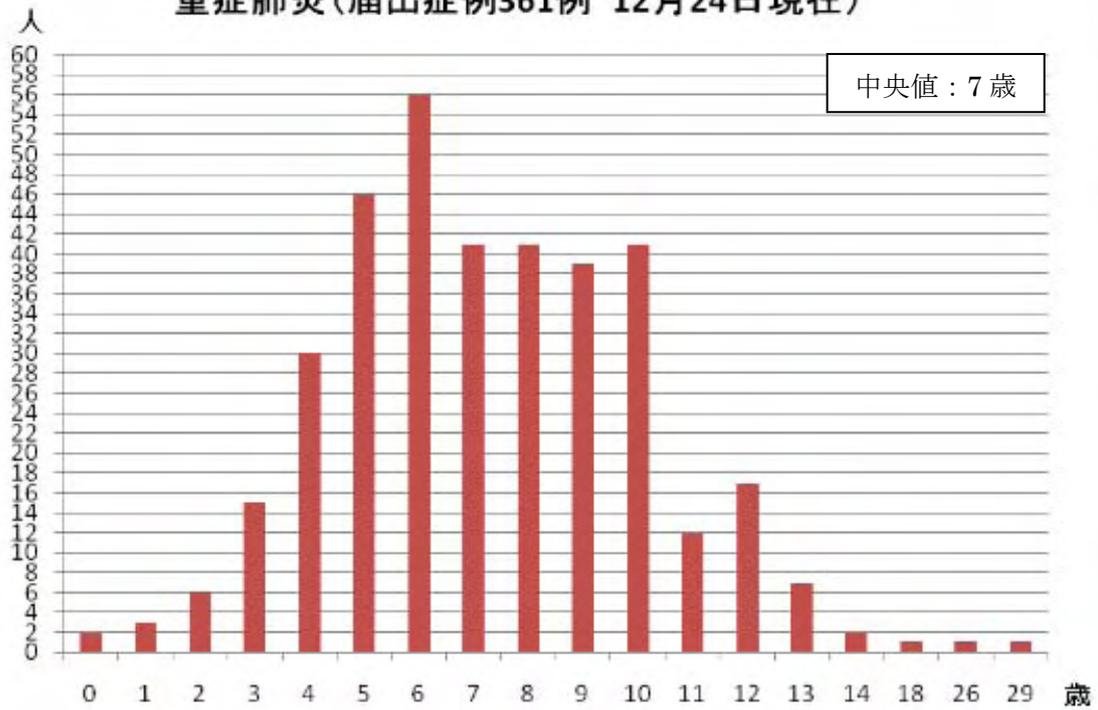
迅速+, PCR+	8 (36%)
迅速-, PCR+	1 (5%)
迅速+のみ	13 (59%)
臨床症状	0 (0%)

インフルエンザの重症度は、22 例中 21 例 (95%) が軽症例でオセルタミビル投与後速やかに軽快していた。しかし、重症例として 1 例報告があり、日齢 28 の児で、肺炎球菌とインフルエンザの混合感染による重症肺炎のため人工呼吸管理が行われた。

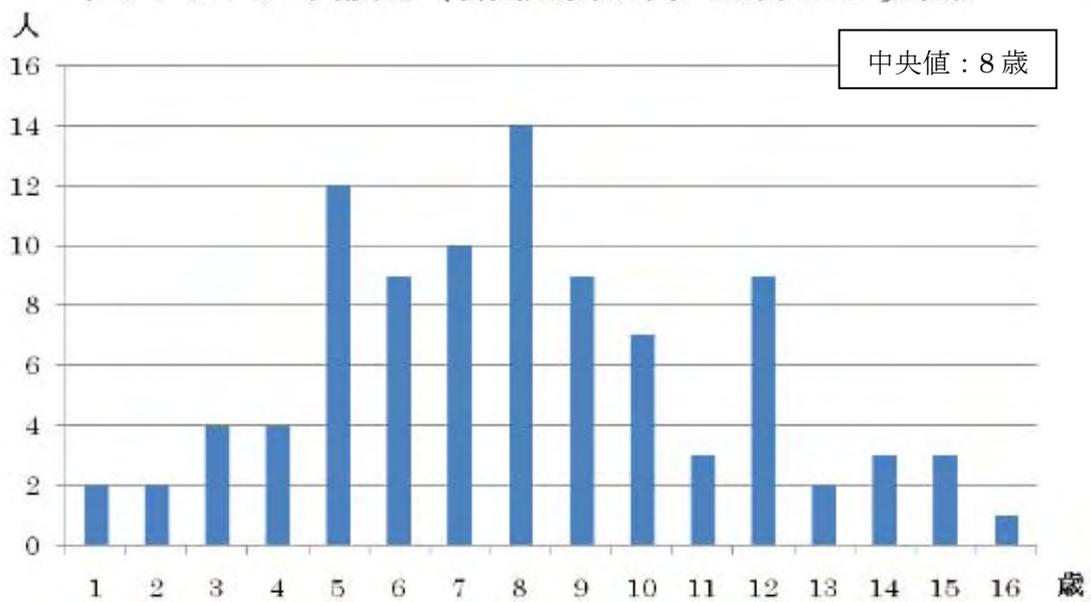
オセルタミビルは、22 例中 5 例 (23%) が 3mg/kg/日、16 例 (73%) が 4mg/kg/日で投与されていた。その臨床的効果は 20 例 (91%) が有効であった (図 2)。また、20 例 (91%) が副作用はなく、副作用報告は 1 例あり、軽度の下痢であった (図 2)。



重症肺炎(届出症例361例 12月24日現在)



インフルエンザ脳症(届出症例94例 12月24日現在)





（日本小児科学会新型インフルエンザ対策室 文責 森島恒雄）